# 編集後記

周知のとおり、わが法学研究会では、定年（選択定年を含む）を迎えて御退職される専任教授に対して、記念論文集を特集して献呈することを恒例としている。

中村勝範教授が、本年三月をもって義塾法学部を退かれる。ここに記念の特集号一冊を編み、御退職記念の論文集とするゆえんである。

中村勝範教授は、今は亡き碩学・中村菊男先生門下の逸材として日本政治史・政治学を専攻し、研究・教育に眞摯に専念された。恩師たる中村先生の文字どおり直弟子と呼ぶことが出来よう。その輝かしい業績・経歴は、別掲に見るとおりである。義塾を御退職後は、北関東に新設が計画されている某大学に最高責任者として御赴任の予定、と仄聞する。新天地でのより一層の御活躍を切に希求したい。

本号担当の責任者として、この〈編集後記〉を執筆している筆者は、実は、知る人ぞ知るとおり、過ぐる昭和三十年に共に義塾に残った中村教授とは「同期の桜」である。わが法学部には、その年、たまたま七名の多数であったので、口の悪い先輩のなかには、われわれを指して「七人のサムライ」と呼ばれた方もいたらしい。

その「サムライ」も、事情があって早く塾外に去ったK君は別としても、高鳥（林脇）トシ子君が意外に早く退職され、十時厳周君につづいて、今春は中村君と賀川俊彦君の両名が義塾を去られる。残るは宮澤浩一君と筆者の二人となった。寔に感慨なしとしない。

ところで、中村教授は信州の産、その学問と人柄については、すでに定評がある。古来、才智と美貌の両者を兼ね備えた女性を指して〈才色兼備〉と稱するが、卑見をもってすれば、中村教授こそは、〈才色〉ならぬ〈才徳〉兼備の人、と思考される。教授の〈徳〉を慕って来る門下生は数多いと聞く。本誌を飾る多彩な執筆者の顔振れを見れば、そのことはすぐに首肯されよう。

その中村教授の御退職は、筆者個人としても、ひときわ惜別の感にたえないものがある。将来に向って、われわれ義塾法学部のために、従前にかわらぬ御教導を希求して止まない。

法学研究編集委員一同は、中村教授の末長い御健康と御研究の発展を、心より祈念するものである。

平成七年一月

法学研究編集委員会　向井　健